

## 遥かなるか児童の世紀

井垣 章二

IGAKI Shoji

わたしは、45年間、同志社におりました。45年の間、病気で休講したのは、1回だけでしたね。ここ40年近くは、ゼロです。毎年、春になって第一回目の講義がございます時、今年はどうかな、この記録は続くかな、とわたしは思うんですよ。そして、今年も一度も病気で休講することなく、無事に過ごすことができました。ところが、2月の半ばに、ものすごい風邪をひき、40度もの熱を出しまして、果たしてこの講義に間に合うかと思ったぐらいでした。…しかし、無事にこのように、たくさんの皆さんにお会いできて、それだけでもう十分です、と言いたいところではありますが、先程ありましたように、なんらかの話をさせていただくということになっております。そんなことで、ご静聴願えれば、と思っております。

この20世紀は、『児童の世紀』ということですが、エレン・ケイという、スウェーデンの教育学者、社会思想家、或いは、女性解放運動家がおりました。この人が、来るべき20世紀に向けて、1900年に『児童の世紀』という本を書いたわけであります。わが国では、大正5年に訳されまして、大正5年、と言いますと1916年でございますが、日本の児童教育と女性解放運動に、大きな影響を与えました。初版は大正5年でありますけれども、この本は大正9年の版になっています。毎年増刷されて、それだけその時代の日本の人々に読まれたということがわかるわけですね。で、日本の児童問題、児童教育、児童福祉では、必ず、「20世紀は児童の世紀」と、どんな本にでも書いてあるんですね。アメリカなどでは、滅多に出てこないんです。ですから、これは日本だけのことかなあ、と思っておりました。けれども、レーニンの奥さんのクルプスカヤという方がいらっしゃいまして、この方の本を読んでいると、「かの有名な、エレン・ケイの『児童の世紀』」って、書いてあったところがあってね、ま、そういうことでみますと、やはり、その時期に世界中で、いわばヒットしていた本であつたらしいですね。……

この方は、岩波文庫では、『恋愛と結婚』という、2冊に分けた本が出されております。これは、昭和48年、1973年の版になっておりますね。でありますから、『児童の世紀』は、後になって玉川大学出版が新たに出版し、それは見ていないんですが、そんなことはともかく、『恋愛と結婚』の方は岩波文庫になった普及版ですからね、一般の人々にたくさん読まれているのではないかと思いますね。ところで『児童の世紀』で、一体何を彼女は言わんとしたか、「その時期の世界各国は、20世紀に向けて何をしとるかと言えば、軍備の拡張ばっかしやとるじゃないか」、ということであ

りますね。そういうことで、世界の平和を希求いたしまして、その為には人間が改造されないかん、と。戦争をしない人間をどうつくるかということだ、と。それは、子どもから始めるということなんですよ。平和の願いをこめて、彼女はこの本を書いたわけでありましてね。教育、教育、てどういう教育かと言うと、その時期に行っているような、子どもに対する抑圧、干渉であってはならない、と。これは、今もそうやと思うんですが、当時の学校は、子どもの魂を壊してしまっていると、書いております。魂を虐殺しているのが学校だと言うんですね。そんなものであってはならん、そういう抑圧、干渉であってはならん、一切、それを排除して、子どもが本来持っている伸びうる力や個性の発達を助けるもんじゃなくてはならない、というんですね。これは、彼女だけの考え方じゃなくて、『エミール』とかね、ルソーからずっと流れを酌んでいることは、お判りだと思います。ところが、彼女は、徹底的な母性主義・家庭主義であるところが特徴なんですね。家庭こそ、児童の発達する、または教育する場だと言う。学校なんか辞めてしまえ、と言うんですよ。この点、時代に逆行しているんですけれども。もう一つのこととして、家を出て働く婦人というものが出てきました。彼女は、これに反対致します。今と違まして、「婦人よ、家に帰れ」、と言うわけです。女性の一 番の役割で何んだと言え、立派に子どもを育てることにある。立派に子どもを育てて、それが、女性のできる唯一無二の社会への貢献だというわけですよ。彼女は、その本をご覧になれば、第一章に特徴があります。第一章が一番肝心ですね。第一章を「子どもの親を選択する権利」で始めています。こんなことはできませんね。皆さんもどんな家に生まれたか分かりませんが、いい家庭に生まれられたからこのように立派に育って、いや育つ、て失礼ですが、立派になっていらっしゃるんじゃないかと思うんですよ。選べないですね。彼女はこう言うのです。子どもにとって、良き家庭、良き母であるということと良き親であるということ、これは、子どもが選べないから、親は絶対にそうならなければならない、というわけですよ。だから「結婚は愛し合う男女が結ばれ、愛し合う夫婦の下に子どもは育てられなくてはならない」というんですよ（『恋愛と結婚』）。それほど、家庭主義、母性主義、徹底しておりますね。だから、今のフェミニズムのいき方とは違いますよ。

ところで、『児童の世紀』はこれが大正期の女性解放運動に大きな影響を与えたと言いました。皆さんも、名前は知っていらっしゃるし、わたしよりずっと詳しい人があると思うんですが、平塚らいてう、という女性です。この人がエレン・ケイの考え方に立って、女性解放運動をやったんです。だから、彼女はエレン・ケイの後継者であったわけですね。エレン・ケイの後継者は、ちゃんと大正期におったわけですよ。彼女の言うことは、その通りなんですね。女性の務めは、家庭にいて、子どもをしっかりと育てて、立派に子どもを育てることだ、と。しかし、この子どもは、単に親だけの子どもではない、と。お国の、社会の子じゃないか、だから、社会・国家も、これを、手助けしなければならない。今日で言う、子育て家庭支援ですね。これは、エレン・ケイもそれを言うところでもありました。子どもは親の子であると共に国の子だ、と、だから社会も子育てを手伝

え、というわけですね。しかし、与謝野晶子は、これに反対しております。こんなことを言うのは偶然のことでね、らいてうとか与謝野晶子に、全然関心無かったんですよ。民放の深夜放送やったと思うんですけど、ビデオ撮るときまして、ある映画を観ました。それは『華の乱（はなのらん）』というんですよ。あれ観てね、ぼくは面白い映画だと思ったね、映画って本当に面白いですね。－（笑）－あの映画、主役が誰やと思いますか。吉永小百合なんですよ。確か、夫役は緒形拳だった、と思うんです。それで、『華の乱』を観て、驚いたんですが、家庭の情景なんですがね、子どもがいっぱいいるんですよ。いっぱいいて、数えようと思っても、数えられないんですよ。子どもがたくさんいる、大騒ぎですよ、戦場ですよ。そこで、吉永小百合の晶子は、こんな小さな机に向かって物を書いてるわけ です。彼女のやったことは、源氏物語の翻訳っていう大作、たくさんの歌、詩、それからたくさんの社会評論を、書いたんですよ。すっかり感心して、さっそく岩波文庫を探したら、与謝野晶子論集というのがあってね、これを読んだんですよ。それ迄知らなかったし、読む気もなかったんですがね、映画を観て発心したわけです。映画を観ても、勉強するのに役立つわけですね。これを読んでみるとね、はっきりと書いていますね。らいてうも出て来ますけれども、「エレン・ケイの考え方には、わたしは納得できん」ということをね、書いております。彼女の言うのは、婦人参政権ということについてはらいてうと一緒になんですがね、行き方において違います。国家社会が子育てを援助するというようなことは、彼女の言葉では「依頼主義」として、承服できないわけですよ。家を出て働く、という、家でもいいんですが、女性が仕事を持って経済的に自立し、そして、子育てもする、ということなんですね。それで、晶子に何人子どももいたか、知っている人、あるでしょうか。…なんとね、11人です、イレブン。こんなことは知らななだろうと思って、女性学、家族問題の天木先生に聞いたたら、ちゃんと知っていらっしゃるんですよ。流石ですね。11人。2人は早く死んだんですがね、9人をずっと育てたんですよ。そして、戦場みたいな家の中で、あれだけの本を書いたんですよ。こりゃ、スーパーウーマンですよ。みんな、真似できないと思うんですが。今、わたしも、市の審議会の関係で、子どもを預けて働く保護者会の、働く女性に会うんですけどね、こうおっしゃるんですよ。「ひとりやったら何んとかなるが、ふたり生めば、2倍どころの手じゃないですよ」とね。2人以上の子どもを生んで育て、仕事もするのはとんでもない大変なことや、とおっしゃるんですよ。しかし、時代が違いますわね、11人の子どもを育てるのは、晶子だけじゃなかったんですよ。当時の日本の家庭と学校、それを包摂する地域社会と言いますかね、そうした器の中で、子どもは恙なく育つことが、できたんだと思うんですよ。今はそういうものが無いですから、どんな子どもが出て来るかわからんわけですよ。そういうふうなことでありまして、11人の子どもを育てて、彼女は65才で死んだんですが、らいてうのほうは、戦後まで生きて戦争が終わった後は、平和運動等で名をあげました。わたしも、京都市の子育て支援プランてなものを色々やりましたけどね、もし、このおふたりが、今生きていたら、どのようにおっしゃるか。おふたりとも、一応、納得されるんじゃないかと思いますね。

我々のこの社会は、新しくなってきたわけですが、ひとつには、農業社会から工業化された社会になったということでもありますね。それと、わたしは、児童問題でお話するわけですから、もうひとつの変化としては、子どもというものは、かつては、「小さなおとな」として区別なく働いていたわけでもありますね、その子どもが、労働から解放されて、子どもとして保護され、そして、教育を受けるということ、言わば、子どもは工場に行かないで学校へ行く、という子どもの世界が確定される。そういうことが、19世紀から20世紀の前半にかけての、先進国における大きな動きであります。

今でも、開発途上国ではその域にも、未だ達していないわけでもありますけれども。産業革命期には、子どもは、安上がりで従順な労働力として、こき使われたわけでもありますけれども、これに対して、1802年にイギリスで、世界最初の工場法、今で言うたら、労働基準法の前身のものができて、それは、大人の労働者を過酷な労働から保護する、というんじゃなくて、子どもだけについてのことであったんですよね、最初。要するに、工場法と言いますが、実際は、児童労働保護立法であった。そして、なんの為にそれをするかと言えば、どうしても、子どもに教育を与えなくちゃならない、しかし、14時間も16時間も働かして、教育の時間で出てきませんよね。だから、教育の時間を生み出す為に、労働時間を短くせざるを得ない、ということであったわけですね。こういうふうにして、しかし、一遍に改革はできないわけではありますが、徐々に、働くことから学校へ行くことへと、転換して行って、これには100年以上かかるとるわけですよ。日本の場合は、後進国でありますから、ずっと遅くこの対応が始まるわけでありまして、日本最初の工場法は明治44年でありますから、1911年でありますね。しかし、法律は出来ても、実施されなければ、絵に描いた餅でありますから、なんと、5年間も遅らされて、実施されたのが大正5年、1916年でありますね。この法律見ますと、12歳未満は工場が雇ってはならんちゅうんですよ。12歳になったらいいんですよ。それから、15歳未満の子ども、12歳、13歳、14歳、の子どもはですね、12時間の労働、と。それまで、13時間、14時間、16時間と働かせとって、12時間にせい、というふうなことを言うても、資本家はすぐに応じなかったわけですよ。そして、15歳未満は深夜業を禁止されました。深夜業ちゅうたら夜10時から朝の4時迄ですよ、15歳未満と女性はいかん、と言うたのが、この大正5年になって、やっと、でありました。しかも、社会政策学者に言わせれば、これは、いっぱい抜け道があってザル法やった、と言うんですからね。そういうことで、子どもが、労働から解放されて学校へ、というのに、いかに時間がかかったか、長い闘いであったか、ということがわかると思うんですね。

我々、社会学の方では、近代家族、という言葉が、使われています。近代家族て、一体何や、ということですが、これは、父親が働いて、その稼ぎで妻と子が養える、つまり、奥さんは家にいて、家事育児に専念できるという、家族なんですね。これを、家族社会学では、近代家族と言うわけです。日本でいつ頃できたか、と言え、大正の半ば位だということですよ。都市においてようやく形

成された、というんですね。『主婦之友』という雑誌、もう、今は無いですよ、それが出来たのは、大正6年、1917年でありますね。主婦が、そういうことで、初めて登場したわけでありまして。それが、近代家族の成立ということでもありますね。しかし、この時期の統計見てみますとね、工場、主として主力は紡績工場等でありますね、ここで働いている工員、普通、工員と言えば、男のイメージがあるんですが、この大正の初期における統計では、工場で働く人たちの6割が女性であったわけですね。もちろん、オバンでなくて、若い娘であったわけでありまして。しかし、子どもは、労働でなくて教育へという流れ、転換は、着実に進行して行ったわけでありましてね。

アメリカの児童問題、児童福祉、読んでいますと、“Child-centered Society”という、言葉が盛んに出てます。ご承知の通り、「児童中心社会」ですが、どうしてアメリカはそうなのか、と言えば、国の元首であります大統領が、全国の児童関係に携わる人達を呼んで、児童に関する全国会議を開いているのです。定期的に。10年に1回です。この第1回が、1909年に開かれているわけでありましてね。ということは、アメリカでは、児童問題は国家的な課題である、故に、大統領招集の全国会議をやつとる、ちゅうんですからね、こんな国は他に無いんですよ。第1回は、セオドア・ルーズベルトの代でありまして、大統領がいいこと思いついたから、ということじゃなくて、女性ソーシャル・ワーカーのアイディアから生まれて、その運動で遂げられた成果であったわけなんですよ。

19世紀、特に後半であります、この慈善博愛活動というのは、イギリスやアメリカで、非常に盛えた時代でありますね、主役は、中産階級の女性であったのですね。彼女達の夫である、旦那さん達は色んな事業を起こして、資本家として、大いに稼いだ。そして、生産は躍進して社会は豊かになったわけでありまして、豊かな生活というようなものは、一方の人たちだけのものであって、大半の民衆は貧乏から抜け切れなくて、それどころか、ますます貧乏であったわけでありましてね。マルクスが言いましたように、一方における富の蓄積は、一方における貧困の蓄積であった、という通りの状況でした。そして、生活に苦難する人と、豊かな生活を謳歌する人の、二つの階級の分裂があるわけでありまして。しかし、キリスト教の教えによれば、人間みな平等であって、困っている人を助けるのが、神の教えに従うことである、と。神に忠実であるということは、困っている人を助けるということでもありますね。そういうことで、旦那方は、お金を持っていますから、慈善団体に寄付する、これもひとつのやり方でもありますね。その奥さんは、旦那が稼ぎまくっているけれども、慈善団体の役員をしたり、或いは、ボランティアとして、言わば、貧しい人たちの手助けをしているという形で、神の教えに応える、というバランスがとられていたわけでありましてね。そういうふうなことでありまして、そうした社会福祉、ソーシャル・ワークの活動ということを考えてみればね、困って援助を要する人にあたたかい手を、ということでもありますね。これは、家庭でやっていることなんですよ。家庭の、幼き子どもを慈しみ育てる、年老いた親を面倒をみる、ということは、あたたかい愛の手を、という家族の愛でありますね。家庭においては、まさに、無償の行為でありました。やったから、お金をもらえるわけでもないんですよ。そうした、家庭の

主たる者と言えば、女性であり、母親であり、妻であるわけですよ。それが家庭を越えて、寄る辺無い子どもに、そういう形になるわけですね。これは、何ら、稼ぐ為の労働ではないわけですよ。家庭におけるそのものを他に及ぼす、という、博愛衆に及ぼし、なんですよ。

当時、下層階級の女たちは、働かなければ食べていけませんよね。そうした、社会で働く、工場なんか勤めている、それは止むを得ないことであり、女という者は、家を守り、家族の世話をすることであるわけでありますね。家庭を越えた外の世界で、みんな汚（けが）れているわけですよ。家庭は、神聖であるわけですね。神聖というものは、家にいる妻が守っているわけでありますね。神聖な家庭で、神聖な、天使のような子どもが育つわけですよ。夫も社会に出たら、悪いことばっかりいっぱい、いかがわしいこともたくさんあって、みんな、汚れて帰って来るわけですよ。家に帰って、神聖な家で心洗われて、また、明るく日は悪い世界に出て行く、ということであつたのですね。そうした奥様方の働きというものは、無償の行為であります。慈善活動、稼ぐんじゃないんです。かつて、日本ではね、共に働いている、稼いでいる、これ、共稼ぎ夫婦とか言うて、共稼ぎという言葉で通ってたんですよ。いつの日か、それはいかんことになりましたね。今、どんな新聞ご覧になりました、どんな本読みました、共働きと書いてあるわけですね。わたしも経験あるんですが、何年前だったか、「共稼ぎ」て言うたら、女の人がいやあな顔するんですよ。誇らしき中産階級の婦人は稼いでいるわけじゃないんですよ。女性としての能力を社会に示し、そして、社会に貢献している、という形で働いているんだというわけですよ。「稼いでいるんじゃないよ」という意識が、日本の働く女性にありますよね。これに、反対している、篠塚英子さんという、経済学者がいます。「共稼ぎ」と、敢えて使うんですね。どういうことかと言いますとね、もし、働く、ということが、職場で働く、ということであれば、それだけでは、人間の生活は成り立たないわけですよ。家庭において、たくさんの仕事があつて、これ無しでは働けない、というたくさんの仕事がある、というわけですね。ところが、ご覧なさいよ。ほとんど、女性がやってるやないか、というわけですね。男も、同じように、家事育児、家庭のことをそれだけしたら、共働きだ、と。家事労働も、また、働くということ、とね。だから、家庭における労働は、共働きになっていない、とういことで、「共稼ぎ」という言葉を敢えて使うというんですね。

ということで、その時代の、女性達が慈善活動で活躍していたんですが、もうひとつ、慈善活動における新機軸が現れてきたわけでありますね。それは、セツルメントの運動ということなんですよ。慈善活動というのはええとこのお嬢さんが、スラム街にやって来て、そして訪問して、また帰ってしまうわけですが、セツルメント というのはその貧困社会そのものに住み込んで、貧困社会の貧しい人達と共に生き、そして、サポートしながら、という形で、その社会の改善をしていく、というものでありますね。これを、1884年に、イギリスのロンドンに、オックスフォード大学が、世界で最初につくったわけでありますね。トインビー・ホール、と言うんですね。

トインビーというのは、オックスフォード大学の経済学者の名前でありまして、社会改良の為に

奮闘努力したんですが、若くして、確か、32歳だったかな、命尽きたわけです。この彼を記念して、オックスフォード大学は、貧困社会に、言わば、大学の出張所を設けたわけでありますね。貧困社会の中で、貧困問題を受け止めて、貧困問題の解決を目指したんです。これが、トインビー・ホールでありますね。わたしは、1984年に、ロンドンに行きまして、このトインビー・ホールを訪れたわけであります。ちょうど、井岡先生が、1年間、そこに泊り込んで勉強されている、ということもあって、トインビー・ホールを訪れて井岡先生に会うというのも「ついでに」ではありましたが、一つの目的であったわけであります。

そういうことで、1884年に出来た場所に、1984年に行って、百周年記念の旗を掲げておりまして、ちょうどええ時期に行った、と思っておりますね。みんな新しい建物に改造されて、全然古い物は無いんですよ。ただ、塔みたいな、壁みたいなもんがあって、そこに、トインビーのレリーフがあって、その横に、ジェーン・アダムスの訪問した時の記念の像がありました。ジェーン・アダムスという偉大な女性が、そこを訪れまして、これだという形でアメリカへ持って帰ったわけですよ。そして、シカゴのスラム街に、彼女の友達と一緒に、セツルメントをつくりました。これが、シカゴ・ハル・ハウスという名の、有名な所でありますね。

ところで、トインビー・ホールというのはね、オックスフォード大学の出張所でしたが、オックスフォード大学に行く男性というのは、貧しい人と共に住み、貧しい人達を援助するって、そんな細かい仕事をするのでは無かったのです。そこで、留まっている男どもでは無いわけですね。彼らには、政治の世界や学問の世界に洋々たる道が開けているわけですよ。でありますから、福祉国家の生みの父である、ベヴァリッジもですね、そこの住民でありましたが、その彼が、トインビー・ホールにいた、てなことは、ま、どうでもええことになって、福祉国家の父として輝いていますわね。

また、アトリー首相、あの人がベヴァリッジ・プランを実行に移した、首相であるわけですね。それを記念してアトリー館が建てられ、留学生の宿舍もそこにあります。かくして、トインビー・ホールは、男の出世の踏み台になっていたわけですよ。みんなが、外へ行く為の一時的な停車場でしかないわけですね。ところが、シカゴ・ハル・ハウスは、これは女の館なんですよ。彼女の下に錚々たる女性が集まりました。全て、アメリカの歴史に残る人ばかりです。ジュリア・ラストロップ、フローレンス・ケリー、それから、エディスとグレース・アボット、これは姉妹ですよ。これみんな、歴史に残る人物ですよ。女の人たちが、社会的にどう活躍できるか、て言うたら、どこもかも閉ざされているわけですよ。考えてご覧なさい、中世の時代から、男が偉くなるちゅうたら、修道院に入って立派なお坊さんになる道ですよ。女の修道院もありましたけど、実際に、天下を取るような立派なもんになるには、宗教の勉強ですよ。その世界は、女性に閉ざされているわけです。女の修道院は、あれは、脇役ですからね。それから、世の中が、段々、こう、複雑になって近代化されていきますと、ルールがいっぱい決められていくわけですよ。法律がいっぱいできま

すわね。だから、法律の勉強というものが、政治の世界で大きなジャンルになるわけですね。だから、大学に行っておまえは何をやるか、これは、その時代の小説やら読んでみたら、法律の勉強している、ちゅうのが、よう出てきますよね。19世紀の小説なんかね。法律、或いは、政治ですよ。色んな産業社会で事業を興します。農耕社会じゃないわけですね。経済の社会。誰が事業を興すか、て、男ですよ。男どもは皆、この社会の中で、登っていく、いろんな道があるわけですよ。女は全部だめですよ。先程言いました、フローレンス・ケリーという女性は、ものすごくできる人で、お父さんは政治家でね、国会の議事録を12歳の時から読んどった、というんですからね。こういう人が勉強で、大学院行こうと思うて行ったらね、断られてね、アメリカでは。1880年代ですよ。若い男女が教室で一緒に並ぶ、てなことは、考えられん、と。あかん、と言うて断られてね。ま、しょうがないから、ヨーロッパへ行きまして、チューリッヒ大学に行つて、そこで、社会主義に触れて帰つて来たわけですよ。そんな時代であつたわけです。だから、女の人、社会的に活躍するというたら、社会福祉の場しかなかったんですよ。だから、生涯の仕事になつたわけですよ。ジェーン・アダムスやそういう人達ね。もし、世が世なら、彼女達は、また、他の分野で、名を成してたでしょう。しかし、優秀な女性が福祉の現場にとどまることによって、社会福祉は大きな前進を勝ちとつたとも言えましょう。

シカゴのセツルメントで活躍した女性たちの違うところは、普通セツルメントといへば貧しい人達を友というかたちで社会変革には関係ないものですが、これに対してジェーン・アダムスはきわめてラディカルだったのです。子どもたちにも危険な作業をさせて、彼女のクラブ活動に来てゐる男の子は工場の事故で死んじゃつたとかにぶつかる。貧乏な人を苦しめている貧困、生活の苦難というのはいっさい過酷で低賃金の労働条件、ひいてはこの産業構造にあり、それが変えられなければならないのではないのかと考えました。彼女は労働運動をリードし、組合運動を支援し、州政府に対し行動を起こしました。事業家たちは苦りきつて、あなたたちはそんなことをやめたらどうか？セツルメント本来の仕事をしなさい。そうしたら5万ドル寄付しましょう、という者も現れてくるわけです。もちろんジェーン・アダムスは応じるはずはありませんでした。で、そのメンバーたちがいわばこの児童労働、こんなことをしていたらアメリカの未来はないと考えまして、児童を労働から解放する社会をつくらなければいけないと。アメリカは各州において法も異なるので、大統領がイニシアティブをとらないといけない、そして連邦に児童局をつくる。それがリードして全国一致して子どもの労働の解放を行うために連邦児童局という国家の機関をつくるために、このハルハウスの女性たちが、イニシアティブをとってルーズベルトに会つて、そして仲間を集めて実現したのがホワイトハウス会議だったのです。

1909年の第1回会議、その結果1912年に連邦児童局ができ、初代局長はシカゴハルハウスのジュリア・ラスロップという女性です。このラディカルな人間をいわば国家機関に登用した当時のアメリカ社会は小さな政府であつたんですね。大統領がソーシャルワーカーの話を聞いて、今の大統領



はしてくれるのか？女性が一番輝いていた時代だったんですね。このように、子どもを労働から解放するという大きな動きが社会・児童福祉にたずさわる人々の手によって拡がったわけでありま  
す。子どもは労働から保護され、学校で教育を受けられるようになり、家で育ち、家から学校へ通  
う。家には母親がいるという形態は1920～30年代でしょうか。子どもにとって家庭があり、学校が  
あればそれでいいのではないのでしょうか？どちらかにいれば心配はいらないのです。

ところで、こんな時代も戦後にあったのかということ、ご紹介したいと思うんですけれ  
ども、ここはね、山の中の、炭焼きを生業にしているね、村であったわけですよ。で、炭焼きで薪  
担いで山の中の、炭焼きを生業にしているね、村であったわけですよ、で、炭焼きの番して重い炭  
担いで帰って来るという、大変な労働なんですね。当時その村では中学の年代になったら一人前と  
考えられていたんですよ。で、自分の体重、つまり40キロやったら40キロの炭を担いで運ぶのが、  
男の子の努め、当たり前のこととして伝統的になっていたと言いますね。戦後中学校が義務化され  
たら、親は困るわけですね。そんだけの働き手を学校に行かすわけにいきませんわね。そんなこと  
で、まあ例えば文集の中から拾うわけですが、お父さんは子どもに言うわけです。「おめー、明日  
は学校行ってよかべ」というわけですね。そしたら初めて子どもは学校へ行けるんですよ。労働  
から解放されて、先生や友達に会える学校で、あのきつい労働から解放されているんですから天国  
ですね。ある女の子は、また書いているんですね。今度兄さんに、お嫁さんが来ると。兄さんが結  
婚すると大きな変化が起こりますよ。「今度は姉さんが出来るんだからわたしも学校を休まないで  
一生懸命勉強したいと思います」と。結婚というのは労働力ですよ、奥さんも。そら姉さんが来  
てくれたら、下の女の子助かりますよね。しかし逆のことも起こりますね。ある男の子は書いてる  
んですね。今度兄さんは大きくなって町へ、家を出ていくことになったと。そうすると大変だと。  
兄さんが朝やっていた仕事を全部僕がやらなくちゃなくなるといことですね。学校に行けな  
くなりますね。そういう風なことでありまして、これも今も売っていると思うんですが、岩波文庫  
『やまびこ学校』であります、今ではそういうことはないと思うんですね。それで学校、いわ  
ば文部省とか教育委員会の人たちはね、だいたい頭堅いですから、いつもね、親の無理解は困った  
もんじゃ、子どもを学校に行かせんと家で手伝いさせよってと、こう言うわけですよ。ところがそ  
の家庭の苦しい現実を見ていないわけでしょ。それこそこの第一に貧困といいますかね、家庭の暮  
らしということが貧しい家ではそれがなければどうしても立っていかなければ、学校を休まざるを  
得ないでしょ。それがなかなかお偉方には見えないんですよ。もちろん無理をして学校に行かせ  
る親もあれば、学校は困ったもんじゃ、あんなもの行かせるもんかというような形の親もあって、  
親のあり方というのいろいろ変わると思うんですよ。親によってね。そういうことがあるわけ  
です。

1890年の本であったと思うんですが、アメリカの新聞記者でソーシャルワーカーでもあった人の  
書いた、アメリカのスラムの本を読んでこんなことが書いてあって、思うところがあったんですよ。

アメリカのスラム街ってだいたいかたまりよるわけ、イタリア人とかポーランド人とかね。で、ユダヤ人の部落というか貧民街なんですよ。この記者はちょっとユダヤ人のこの貧民街は違うということ。どんなことかという、ものも食わんでも子どもの教育に熱心やというわけですよ。ユダヤの人は知的優秀な人が多いですね。学者、芸術家、音楽家でもようけおりますよ。だからあれは、あの投資といいますかね、19世紀の投資が今花開いてるのかなと思ったり、きわめて短絡的に考えてるんですが、とにかくそういう形のいき方もありますわね。将来をかけて、勉強、学問、教育ということもあるわけですよ。

そういうふうなことで、いろいろでありますけれども子どもが安心して学校に行ける要件というのは、家庭の経済的な安定ということでもありますね。日本では生産の躍進による生活向上と福祉の施策等によって、全ての子どもが恙無く学校に行けるようになったということでもありますね。そのように労働から解放されて、子どもが家から学校へという形、これさえできたら、いわば家庭も学校も安泰であれば、子どもの世界は確立されたということで20世紀は児童の世紀やといえんかな、と思ってたんです。

ところがこの20世紀の前半に2つの大きな戦争をしてしまってるわけです。エレン・ケイはこんなことを言ってるわけですね。天使が上から地上に降りようとして降りてきたら、下を見たら軍艦とか大砲とか兵隊とか、びっくりして天使はまた舞い戻ってしまうであろうと、そういう抗争の20世紀が始まるわけですね。ケイの願いにかかわらず2つの大きな戦争をしてしまってるわけでもありますね。ということだけで児童の世紀ではなくなったというべきではないか。まあ戦争になったら全て台無しですよ。自分の身を守ることでできない子ども、そしてお母さん、最大の被害者です。そういうことで彼女は戦争をしない人間を作るにはどうしたらええかということ、それでこの本を書いたんやということを行いましたけども、願い空しく2つの大きな戦争をしてしまったわけがありますね。第1次世界大戦後国際連盟を形成しまして、ジュネーブ宣言という児童の権利の宣言をやっているわけです。これもやはり平和への願いも込めて行われたものであります。再びあんな世界の戦争は起こらないと言っていてもなく第2次世界大戦なんですよ。それが終わって今度こそはという形で国連を組織して、早々と世界人権宣言、1948年に行って、児童権利宣言を1959年に採択いたしましてね、というふうなことになったんです。しかし、第2次世界大戦が終わって全部平和になったかといえば、まあわたくしアメリカの雑誌『チャイルド・ウェルフェア』の1988年特集号があつて、それでまたちょっとびっくりしたんですが、その時点で世界の50カ国で武力抗争が起こっている、戦争状態だということですね。1989年に国連は児童権利条約というのを採択しました。これは保護の対象としての児童が権利行使の主体としての児童とされる画期的なことでもありますね。条約ですから拘束力を持つわけです。日本も確か1994年に批准しております。

ところでこのね、38条をご存知でしょうか。この38条は武力抗争、つまり何歳から戦闘員として敵対行為に参加させてええか、という条文なんですよ。ご承知でしょうか。実はこの権利条約に

おいて児童とは18歳未満といっております。日本では1947年の児童福祉法で児童とは18歳未満としていたのですが、この権利条約も18歳未満としたんですが、ところがこの戦闘行為につきましては、兵隊として徴募してならないのは15歳未満なんです。15歳やったら兵隊に採っていいんですよ。で、こんな事を書いています。「15歳以上、18歳未満の者を徴募するにあたっては、最年長者から先に選抜するよう努めなければならない」と。いわば兵隊に採る場合17歳の子を採れ、次は16才、それでも足らなければ15歳をとということなんです。これは開発途上国がクレームをつけて18才とんでもない、それでは国は守れないという強力なアピールの苦しい結着だったのです。

わたしは18歳で、今の大学の1年生のときに陸軍二等兵であったわけです。そして九州の大隅半島で鉄砲も剣も持って、兵隊やったんです。ところが沖縄をご覧ください。沖縄の方、我喜屋さんという方福祉の皆さんご承知です。あれ僕より2つ若いんですよ。昭和4年生まれですよ。彼は戦闘員やったんです。戦争になったら年齢もクソもあらへんわけですよ。中学生（旧制）も皆動員ですよ。わたしは18歳だから彼は16歳ですよ。沖縄では戦争になって少年隊を組織したわけです。勤皇隊といいましてね。白虎隊ってご承知ですね。あれは会津藩士が官軍と戦ったとき、会津藩士の16、7の子どもを少年隊として組織して戦わしたわけですね。で、彼も16歳ですよ。彼は本当に戦争したわけですよ。わたしは鉄砲持ってるんですが、一方的にアメリカ軍の飛行機にやられていましたが、戦うというのではなく、しかし、彼は実際に戦ったわけです。で、彼は足を撃ち抜かれて倒れてたわけですよ。で、アメリカ兵が見て、それで急いで野戦病院に連れて行って輸血したんです。彼は今僕に言うんですよ、冗談でね。僕は日本の皮を着とるが、身は全部アメリカで出来とるんやでって。彼はわたしを集中講義で琉球大学に呼んでくれてね、2人で激戦の跡を回ったんです。ひめゆりの塔、これ『ひめゆりの少女-16才の戦場』という本、これを読んでみると彼女が何着てたかという兵隊のシャツ着てたんです、だから兵隊なんです。女の子で、凄惨、凄まじいですよ、地上戦というのは。日本は原子爆弾も落ち、その他大阪も、たくさんの都市が焼けたけど、本当にそこが戦場になったらどんなものかというのが分かりますよね。まさに修羅場ですわね。近くにいた友達が一瞬、バラバラになって肉片になって散っとなるわけですよ。彼女は自害しようとしていた手榴弾をアメリカ兵に取り上げられて生き残って、その収容所でメモを整理して書いて、この本を1995年に出しとるわけですよ。だから女も子どももありませんよ、戦争になったらね。そんなことで、我々まず平和がないとなんともならないということでもありますね。何よりもまず平和をです。

かなり時間が経って、あとはあまり長くないようにしますが、まあとにかく学校、子どもは家庭と学校があったらええと、まあどちらに行っても、どちらかにいたら安心やということになるんですが、家庭において何が起こったかということで、わたしが、偶然のことなんです、何が書いてある本かわからんでね、題名だけで注文したんですよ、偶然。これなんです。The Battered Childというんですね。「バッター」といったらね、まあ、「4番バッター松井」とか、あのバッタ

一は名詞ですが“batter”という動詞があるんですよ。これ見るとね、「打ち続ける」とか「打ちのめす」とかです。“battered”ですから、「打ちのめされた子ども」ということなんですね。まあ題名だけでは何のことやわからへんですね。これを注文して、これは1968年に出とるんですが、そのときは知らず74年版を購入してるんです。これ見ると、まあ、今、あの児童虐待問題なんですね。アメリカではこれが特殊な問題でなくて、多発しているということで、まあ、我々、児童虐待って特異な親の特異な家庭の問題やと思ってたら、違うということなんですね。一般家庭にあり得る膨大なケースというもので、アメリカではいまや国家的な問題になっているということを初めて知ったわけですね。写真もあって、見てもうたらしいんですが、ひどいですね。まあ、横文字ですけども。しかしこれやろうとして、本格的に取り組んだのは、それから10年も後になってね、1985年に「児童虐待の家族と社会」というかたちの論文にまとめたわけではありますが、そのころ、まだそれは児童福祉や児童問題のメインテーマでなくてね、わたしも海の向こうのことや、ってなかたちで書いていたんですが、そして日本ではこういう状況にならないという結論になってるんですが（会場内笑）、いまや、いまやわたしの、科学者の力量の不足から、予測できなかったわけですね。こんななんなとは、わたしも驚いておりますよ（会場内笑）。そういう風なことで、家庭では、慈しみを育てるはずの親が、虐待するんですからねえ、いったい何事やというところがあるんですよ。ところでこれはね、決して…この書いた人も言っているんですね、わたしもそう思うんですよ、育児におけるトラブルだと思うんですよ。子育てが難しいんですね。育児におけるトラブルの一つの表れが児童虐待である。まあ、今現在の家庭が苦悩しているということなんですよ、というかたちでわたしは見ておるわけでありませぬ。

家庭は安泰ではなく、一方、学校ではいったい何が起きているのか。14歳少年というのが非常に問題になりまして、ご承知の通りでありますけれども、わたしも14歳の中学生だと聞いてですね、驚きはいたしましたけども、あるいは、ある意味において納得できたわけです。大人でなくて子どもだからできたかなということなんですね。このことも、いわば、子どものままパワーを持った…持つぐらいの、あんまりねえ、10歳やそこらじゃできませんよね、ゆがんだ育ち方をして、ある意味において子どものまま大きくなったんかなと思うんですよ。まあ、それで全てつじつまが合うような気がするんで、このことは、いわば現代の社会の中で色々な育ち方ができるということじゃないでしょうか。この時代、子を育てることは難しく、子自身も育つことが難しいのではないのでしょうか。でありますから、どんな子どもが育って、何が起こってくるか、つまり、あの事件は空前ではありますが、わたしは、絶後ではないと思うんですよ。考えてみれば、わたしはすぐ、あのオウム事件を思い出しましたね。あれは大人たち、子どもの事件でなく大人がやったことでした。松本智津夫というのは知りませんが、むこうに集まった人は、もう、頭脳明晰な、優秀な人ばかりでしょう。それがあんなことするんですからね。まあ、だから、14歳少年が出てきても、不思議じゃないという感じもするんですよ。

そういうふうなことで、我々は、それじゃどうするのかということで問われると困るんですが、マーガレット・ミードというね、文化人類学者がいるんですが、子どもっていうのは新世界の住民やというんですね。この一言でいいと思うんですよ。まあ我々は、新世界の住民じゃないんですよ。過去の鎧で身を固めておりますから。嫌なもののはねのけて、あるいは逃げたりする術をもっておりますからね。子どもは現代の変化をもらにかぶるわけですよ。現代そのものが、今の子どもをつくっている。現代の問題の象徴として子どもの問題があるわけですよ。そういうふうなことで、まさに、そうしたものが現代社会というのは何者かということを表している事件で、事件として表れているわけだと思うんですよ。ところで、子どもの事件が起こる度に、学校は、家庭は、というんですが、常に、子どもは、っていうのが全然抜けとるわけですよ。この論理はね、大人のおごりやと思うんですよ。そういうことじゃなくて、子どもっていうものを中心にどう考えるかということでないといけないと思うのですが。中学校と小学校が初めて連携して対応するとか新聞に書いてあったんですが、そういうかたちで、子どもをどのように、押さえ込もうとしているかというね、力の、あるいは支配の論理ではないかと思うんですよ。まあ、そんなことを考えている以上、これは、根本的な問題は解決しないんじゃないでしょうか。子どもの世界もみんな仲良く、という甘いもんじゃ決してないと思うんですよ。トラブルが起こって当然やと思いますね。けんか仕掛けられたらどうするかということは、子どもなりに決心、決意しないかんわけですね。逃げるべきか、あるいは戦うべきかということをね。やらないかん。戦うべき時は、けんかする時はけんかするんですよ。それでいいんですよ。何かあれば、例えば自殺した子は、なぜ親に言わなかった、先生に言わなかったかというわけですよ。そんなもんじゃないということを、まず知らんといかんわけですよ。子どももちゃんとした一人の個人であり、自立しようとしている、また自立した個人であるのです。一生懸命人生を戦っているわけですよ。まあ、学校に行かない子ども、不登校とかいっていますけれどもね、学校に行かないというかたちで一生懸命生きとるわけですよ。全て、それぞれの、一人一人の人間として、子どもの人生は、子どもなりに戦っているわけですよ。お母ちゃん頼むわ助けてくれ、先生頼むわって、誰が言いますかね。自尊心、ちゃんとした一人の個人として頑張って生きとるわけですよ。まあ、そういうことをまず…まあ、それで放っておいてええんかというんじゃないですよ。そういう基本をまず理解した上で何ができるかですよ。大人は、「心の教育」とか首相も言うんですがね。難しいことですね。「心の教育」と言ったらうらはらに「持ち物検査」というのは、どう関係するんですか。大人よ、しっかりせい、と言いたいですね。そうじゃないでしょう。子ども自身をどうするかということは、子どもをもっと理解しないかんわけですよ。だから、常に、こう、タテに考えて、大人——大人はちゃんとできとる。心もできて、教育もできるんだと。子どもが下にいるわけでしょう。それは、上から何かできるという、タテで考えているわけでしょう。これだからいかんわけです。大人のおごりだというんですよ、わたしはね。そういうことじゃないんですよ。そうじゃなくて、まあ、ある意味において、ま

ず、子どもというものはどういうものかということ、理解するということ。我々は、大人であることは、優れていて、子どもというものは至らないものやと思っておるんですよ。だから大人が「心の教育」というんでしょう。そんなもん、できるはずもないですよ。ねえ。大人も、「心の教育」ができとるか、厚生省ですらできとらんものやし、大蔵省もできとらんもんね（会場内笑）。まあ、そんな大人がおって何が心の教育ができるかと、言いたいですね。そういうことで、上から下というかたちでの支配の論理じゃなくてね、子どもの…これはエレン・ケイの言うとおりの、子どもの持てる力というかな、これをまず考えないかんわけですね。

もし、子どもという世界、大人という世界、いわば、例えば神戸の事件についてもね、誰が、彼がやったのではというのは、友だちが一番先に気付いたといいます。子どもは子どもの世界で、子のコミュニケーションのネットワーク、親や先生のネットワークは別で二つはつながっていないわけですよ。で、我々、まず、子どもっていうものを理解する、分かってあげるということ、あるいは認め信頼するということ。大人にできることはね、子どもは、まあ至らないというもので大人の方が、ちょっとでも優れているということは、それができるということだけで、力があって押さえ込む力があるということじゃないと思うんですよ。だから、子どもの手助けというようなものは、上から押さえ込んだり、引っ張り上げたりするんじゃないで、ヨコやと思うんですよ。ヨコから、あるいはななめちょっと上かな、あるいはななめ下からちょっと支えるとか、ななめ上からちょっと手を貸してあげるとかいうのが、まあいわば、ちょっとうまいこと言い表せませんけれども、それだと思うんですよ。それを皆、心の教育だ、大人はしっかりせい、子どもは至らんもんやというね、そういう考え方でいる限りはどうしようもないですね。また別のことですが、ボランティア活動などのカリキュラムを含めたら心の教育になるんじゃないかと、考えたりするんですよ。それを悪いとはいいいませんが、しかし要は、そうした思いやりというものが生まれるようなかたちでの、家庭や、学校や、そこで、どう子どもとともに生活するかということですね。まあ、家庭という、親もおじいちゃんもおって、子どももおるんですよ。そうしたいろんな違いがあって、違いが分かって、お互いに一つの共同社会をつくるということ。これをどうしたらええかということね、まあそういうことじゃないかと思うんですよ。

カウンセリングとかケースワークとかいいですけどもね、グループ・ワークの論理ってなもんがね、もっと生かされんといかんと思うんですよ。学校社会をどのように、人間的にね、人間の世界にするか、先生と子どもが一緒になってね。だから、ボランティア科目よりも、一ヶ月間、カリキュラムの中で野外活動でも思い切って入れてですね、先生と仲間たちと一緒に、自然の中で裸の付き合いをするような体験をするとか、そんなことのほうが意味があるんじゃないかなと思うんですよ。まあ要するに、考えなくちゃいけないことは、大人はあまりにも勝手すぎるということ、子どもは至らんから、大人やったら何でもできてると思ってること。これが最大の癌やと思いますね。

時間があまりないんですが、まあ、遥かなるか、20世紀と、児童の世紀ということを言いました

けれども、我々、ともに、この社会の中で、とにかく、このいろんな忙しい中で、流されていって、まあ適当な手直しだけでこの社会を作り直すことはできないと思うんですね。それぞれが努力をしてですね、人間の社会をつくるということ、まあ大人たちが一生懸命やれば、子どもも一生懸命やるわけでありましてね。子どもを信頼し、子どもを理解すれば、まず大人が心の窓を開いたら子どもも窓を開いてくれるわけでありまして。子どもたちの常に言うことはね、分かっていることをうるさく言うなということと、大人は分かってくれないということですよ。自分を正に認めてほしいということですよ。我々、分かろうとせないかんわけでありましてね。子どもを分かってくれれば、子どもも親を分かってくれようになると思うんです。まず分かってくれれば、そのスタートというのは、やはり親の方から、先生の方からだと思いますね。大人対子どもというタテの関係ではなく、両者を共に横の関係で考えることですね。先生対生徒、親対子の関係でとらえるのではなく、学校や家庭でこの世界をどのように人間の世界とするか、それを築くことが課題でしょう、大人と子どもが一緒になって。よい模範を大人が示せば、子どもはそれについてくるのです。大人が子どもをどうするかというのではなく、子どもと共に人間の世界をつくるということです。何かえらい教訓的な話で、申しわけありません。時間でありますから、どうも、ご静聴ありがとうございました。

1998年3月7日午後3：00－4：30

於：同志社大学寧静館5階会議室

#### <付記>

井垣先生は『児童虐待の家族と社会』を、1998年3月ミネルヴァ書房から出版されました。

(編集委員会)

